

「プロとは」

前提

プロは、それしか務まらない。

「この仕事以外に務まらない人間」だけがモノに成る。

*但し、専門バカではなく、以下の項目を実践している中で「この仕事以外、務まらない」という自覚に至った者という意味である。

故に「この点に於いては誰にも負けないもの」を有している。

1. プロは誰よりも豊富な知識と経験を持つ。

しかもそれは、与えられたものではなく、自分の努力で獲得したものである。

一つのことを極めようとするならば、実に様々なことを学ばねばならない。

但し、専門馬鹿はプロではない。(自分の専門しか、学ばないから)

プロは何より、その仕事が好きである。

しかし、好きなるが故に苦しみも倍加する。

プロは、その苦しみを乗り越え、向上し続けることに限りない生き甲斐を感じている。

やっている自分の仕事について、例え徐々にであろうと、

好きになって行けないとプロとは言えない。

好きだからこそ、生き甲斐も感じられる。

2. プロは言い訳しない人である。

言い訳とは、責任を自分以外の原因に転嫁させることである。

責任感を持って仕事に臨め。

3. プロは障害を認めない人である。

従って、どのような障害があっても、求める必要な結果を必ず達成する。

「好き」であることが先決。好きだと障害は乗り越えることが出来る。

4. プロは如何なる時にも、決して弱みを見せない。弱音を吐かない人である。

それだけの執念を持って事に当たれ！ということ。

5. プロは決断が早く、チャンスを決して逃がさない人である。

決断の前提は、教科書の無い世界で、物事が正しく見極められる。

ということ。大人の世界に於ける「頭の良い人」の定義である。

6. プロは、どのように仕事をしたか、ではなく、どのような仕事をしたか。

によって評価される。

大人の世界は結果に於いて判断される。

途中経過に於いてどのように頑張ろうとも、結果を出せないようでは、

プロとは言えない。

プロセスを強調するようでは、アマチュアの域を脱していない。

7. プロは最終的に数字で評価され、経済的報酬で差が付く。

仕事に対する評価には、実は様々であるが、社会通念として、

誰をも納得させることが出来るものが金銭評価である。

8. プロはどこへ行っても銭の取れる実力のある人と言う。
- 自分の仕事が全う出来ている。結果は自ずから付いて来るもの。
- この最たるものは金銭による報酬である。
9. プロは常に現状に於ける自己否定を繰り返し、自己革新を続ける人である。
- 従って、三ヶ月経って何の変化もなければ、既にプロでない。
- 自己革新を続けている証は、三ヶ月以内の変化があるもの。
- この変化とは客観的なもの。
- 自らが自分の仕事に工夫と努力を傾注し続けていると、世間の方から評価してくれる。これが客観的評価である。
10. アマチュアはマイナスが来ると、それに輪を掛けて更にマイナスにしてしまう。マイナスをプラスに変えることの出来る人をプロと言う。
- 一つの出来事をピンチ（マイナス）と捉えるか、チャンス（プラス）と捉えるか、結果は180度変わる。
- つまり、ピンチとチャンスは同形、或いは同時進行である。
- その捉え方によって、プロとアマは大きな差を生じる。
11. アマの領域ではどんなに上手に出来ても、それは単なる模倣に過ぎない。
- 独創性（他が真似出来ないもの）が無ければ、プロとは言えない。
- プロならば、この分野に関しては、他の追随を許さない。
- というものが欲しい。

1 2. アマは他人の批評に左右される。プロは他人の意見は聴くが、自分の価値判断で下す。他人の批評に左右されるというのは、自分の中に確たる判断基準が定まっていない何よりの証拠である。

大事な事は「如何なる状況下に置かれても、自分の核（確たるもの）を失わない。」この核を自分の中に作り上げて行く情熱と努力が何より大事。

中立とは、真ん中に確り立って、足場を固めて立つことを言う。

中立こそ、自分の中に核とした判断基準を持っているということ。

1 3. アマは、これがあるから出来ない。と言う。

プロは、これさえ解決すれば出来る。と考える。

つまり「問題意識を持ってものを見よ。」ということ。

問題意識とは、解決方法の解明に努力を傾けようとするはず。

これを持たなかったら、逆にそこから逃れることしか、考えられなくなる。

1 4. アマは変化が来た時、ダメだと思い、プロは変化が来た時、チャンスだと考える。要するに変化に弱い人間は、プロには成り得ない。

1 5. アマは、いつもやり直しが効くと思い、プロは、いつもこれが最後だという一期一会の精神で臨む。

本来仕事というのは、お座なりで出来るものではない。

それは「お遊び」である。

常に全力投球で臨まなければならない。

全力を出して仕事をする。とは、意識の有無に関わらず、

やり直しを想定して臨むということは、普通は考えられないのである。

16. アマは見逃すことが多いが、プロは何をやっても、皆仕事に結び付けて考
える。

17. アマは自分が出来るだけで、満足する。

しかし、人に教えることが出来てこそ、プロと言える。

自分の中で、そのことが「モノ」に成っている（身に付いている）という
何よりの証拠。

本当に理解出来ているか、どうかを確認するには試しに、
身近な人に伝授してみることに。

18. アマは途中で諦め、投げ出す。プロは諦めを知らず、最後まで食い付いて
離れない。（プロ根性）

己の為すべき仕事にこだわるならば、徹底すべきである。（プロ）

中途半端にこだわることほど、無意味なことはない。（アマ）

19. アマは仕事以外に生き甲斐を持つ人。

プロは仕事そのものに生き甲斐を持つ人。

生き甲斐とは、己の一生を懸けても惜しくない仕事に出会えること。

これは人として一層相応しい生き甲斐である。

プロは、そのような仕事を持ち、そこに己の一生を懸けることの出来る人
である。

20. プロ同士の差は、どこで付くのか？

乱世（先の見えない、見通しの立たない時代のこと）は、

プロだけが生きて行ける時代。

プロ同士の開きというのは、環境が厳しくなると目立って来るもの。

先を読む「読み」に於いては変わらない。

差は「投げないこと」「諦めない、粘り」である。

「読み」は技量（テクニック）「粘り」は精神面。

プロ同士の差は、紙一重の差であり、それが天地の開きになる。

「これだけは、他社が真似出来ない」というのがプロの開きである。

21. ピンチとチャンスは同形である。

責任者の決断と根性が勝敗を分ける。

楽観はしない。そして悲観もしない。ひたすらに平常心で。

不利な局面では、諦めずに粘り強く淡々とこなして行く。

これが勝負のツボを見出すポイントになる。

勝負どころでは、ごちゃごちゃ考えないこと。

知識を智慧にすることは、何かを覚えるそれ自体が勉強になるのではなく、

それを理解しマスターして自分のものにする。というプロセスが最も大事

である。

守ろう、守ろうとすると、後ろ向きになる。

「攻撃は求心を招き、防御は離心を招く。」

全体を判断する眼とは、大局観である。つまり、直観力のこと。

それは感性が左右する。ギリギリの勝負で力を発揮出来る決め手は、

大局観（道理）と感性（情理）のバランスである。

決断は自分の中にある。

ギリギリの決断・判断は、その人の本質から出て来る。

目標があってこそ、決断である。リスクを背負って決断を下すという

人を育てること。

2 2. 大義名分（目的の明確化）

プロ同士の戦いの中で大事なものは、この大義名分を如何に我がものに出来るかである。

会社が大きくなるにつれ、苦勞を共にした幹部が、その後

人間的に大きくなってきているか、が大事。

つまり、それだけ「人が使えるようになる」ことが、最も大事。

仕事は出来ても、人が使えないのでは、人が付いて来ないのである。

2 3. 集中力

人に教わったり、聞いて身に付くものではない。集中出来る環境を自ら作り出すことこそが、大切。

勝負の結果を次の日に引きづらないこと。

(禅の悟りは、喜怒哀楽の時間を出来るだけ短くすること。引きづらない。)

立ち合いで負けると、力を発揮出来ない。先制主導の大切さ。

自分なりのスタイルで信念を持つことが大事。

自分が「これだ」と思うものをとにかく、実践してみることに。

頭の中で考えていたことの何倍もの学びが、そこから表れてくる。

そして理解度が深まることで、自分の頭の中が整理されアイデアも浮かび易くなり、新たな道も拓けて来る。

24. 才能

同じ情熱、氣力、モチベーションを持続すること。

プロらしさとは何か。と問われれば、明らかにアマチュアとは違う特別なものを持っており、その力を瞬間的にではなく、持続出来ることである。

25. プロは、ひたすら飽くことを知らず、基本原則を繰り返す。

創造とは、繰り返しの中から生まれる。

困ったり、行き詰まったりする。振り返るべきは、原理原則以外に無い。

本物は、常に原点に返ることが出来る。だから、更なる成長がある。

26. プロは、マンネリの克服法を知っている。

マンネリは自分で脱するより、他に方法が無いことを、そしてマンネリは自分の甘えから生まれることを知っている。

自分に甘い人は、プロに成れない。

強い意志で、自分の甘えを追い出すことから始まる。

27. プロは、もうこれで良いという限界を知らない。

人の一生には自ずと限界がある。しかし、限られた時間内に於ける工夫は無限に存在する。人は、有限の中に無限を生きている。

無限の工夫に向かって努力することが大切。

28. プロは、どんな些細なことにも、常に全力を奮って立ち向かう。

自分の仕事に関して多くの漏れがあるというのは、もはやプロではない。

どんな些細なことも、見逃さないという姿勢と努力に尽きる。

29. プロは最大の敵が自分自身であることを知っている。

仕事につまづくと、ほとんどは自らを許してしまうことに起因している。

逆に、仕事に間違いがないということは、己に厳しいということ。

(自分の心の弱さを熟知しているから)

30. プロには、狎(な)れが無い。常に初心である。

初心を忘れ、驕る時、墮落が始まる。

「今を始めとして、事を為す。」つまり、自らの心に隙を作らなくする。

魔は間(隙間)である。

31. プロは常に勘を磨き続ける。

本来、勘というのは、仕事の実践を通して培うもの。

己の為すべき仕事に日々精進する。

32. プロは理論武装を怠らない。

仕事について努力をする。自ずと学ばなければならなくなる。

学ばずには居られなくなる。

33. プロには休息が無い。しかし、ゆとりは充分にある。

休息が無い。というのは四六時中、仕事のことに精魂を傾けている。とい

うこと。この仕事に対する真摯な努力は、自ずと自信につながる。

この自信から、心にゆとりが出来て来る。

34. プロは孤独である。誰の助けも期待しない。

本来仕事は、自身の責務を果たすもの。他人を当てにしていけない。